

# 江戸言葉のアクセントについての一資料

— 齋藤彦鷹の音声論 —

福 島 邦 道

国語アクセントの史的的研究については京都を中心とする地方にはすぐれた資料が集つていてその研究がいちじるしく進んでいるが、東京アクセントの史的的研究は資料などの制約のためまだまだ不明なところが多いようである。ところが齋藤彦鷹の「音声論」の中に江戸言葉のアクセントについての記述がなされている。この書は文政五年、著者五十五歳の時に出版され、国語の発音全般について記されている。彦鷹は明和六年に三河国矢作に生まれ、安政九年、十三歳で江戸に移住し、伊勢貞丈本居宜長などにも教をうけ、安政元年八十七歳で没した。(「国学者伝記」(筑波)による)

同書の「同言異音」の條に

今ここにあぐるは師(音長ラ)のわきためとはいさゝかたがへるふしあるべし師翁は都近き伊勢国の音声をもて記されたり我はこの大江戸の音声もてしるべればなり

といつて、江戸言葉のアクセントの表を示している。その記載例は左のようである。

戸	解	羽	射	平声	入	葉	齒	疾	砥	去声
	以下上に准へて推當るべし	羽風の時は上声にかわる	射矢の時は上声にかはる		這入の時は去声にかはる	木の葉の時は去声にかはる	齒固の時は上声にかはる			豆煎の時は上声にかはる

百十八の同音の語をイロハ順に平上去の三声に分ち、おわりにかくわかつてるうへにも又上下のつゞきによりて平声たちまち去声に変じ、上声やがて平声にかはる常也(ツキ)も又国々の音声によりてかたみにかはれる事ありかにかくにも異ならばことなるまに三声定かにわかたざれば同じ言なきわくべきやうなきを(註二)

江戸言葉のアクセントについての一資料

と書いてむすんでいる。ここに音声論の語彙を整理し、東京語のアクセントと対照してかかげてみよう。

(註一) 音声余論と題する写本が国会図書館静嘉堂分室にあるが、この続編といえる。

(註二) このあとに子息の豊長が四声観をのべている。

(註三) 東京アクセントについては、山田美妙日本大辞書、国語発音アクセント辞典、日本語アクセント辞典(新・旧版)、辞海を参照し、問題のある語については金田一春彦先生の御教示によるものが多い。動詞の連用形をとっているものは名詞と考えて記し、両様の発音のある語については古形と思われるものをかかげた。

A 二音節語

平声 東京アクセント	上声 東京アクセント	去声 東京アクセント
咲 アキ(ガ)	明 アキ(ガ)	秋 アキ(ガ)
恋 コヒ(ガ)	脚 アシ(ガ)	悪 アシ
神 カミ(ガ)	充 アツ(ル)	暑 アツ?
傍 カタ(ガ)	入 イル(モノ)	煎 イル(モノ)
垣 カキ(ガ)	沖 オキ(ガ)	起 オキ(ガ)
追 オヒ(ガ)	生 オヒ(ガ)	笈 オヒ(ガ)
置 オキ(ガ)	柿 カキ(ガ)	蠣 カキ(ガ)
射 イル(モノ)	紙 カミ(ガ)	肩 カタ(ガ)
厚 アツ(イ)	乞 コヒ(ガ)	上 カミ(ガ)
草 アシ(ガ)	埼 サキ(ガ)	裂 コヒ(ガ)
鮑 アキ(ガ)		

日 ヒ(ガ)	羽 ハ(ガ)	寝 ネ(ガ)	戸 ト(ガ)	毛 ケ(ガ)	平声 東京アクセント	縫 ヨル(モノ)	夕 ユフ(ガ)	住 ユキ(ガ)	森 モリ(ガ)	巻 マキ(ガ)	拭 フキ(ガ)	干 ヒル(モノ)	橋 ハシ(ガ)	履 ハタ(モノ)	呑 ノミ(ガ)	解 トキ(ガ)	弦 ツル(ガ)	月 ツキ(ガ)	立 タチ(ガ)	嶽 タケ(ガ)	住 スミ(ガ)	蛙 サケ(ガ)
榻 ヒ(ガ)	葉 ハ(ガ)	音 ネ(ガ)	外 ト(ガ)	蹴 ケ(ガ)	上声 東京アクセント	依 ヨル(モノ)	結 ユフ(モノ)	雪 ユキ(ガ)	盛 モリ(ガ)	榎 マキ(ガ)	蕨 フキ(ガ)	屋 ヒル(ガ)	端 ハシ(ガ)	掃 ハク(モノ)	蚕 ノミ(ガ)	時 トキ(ガ)	釣 ツル(モノ)	尺 ツキ(ガ)	劍 タチ(ガ)	竹 タケ(ガ)	墨 スミ(ガ)	酒 サケ(ガ)
火 ヒ(ガ)	齒 ハ(ガ)	根 ネ(ガ)	砥 ト(ガ)	氣 ケ(ガ)	去声 東京アクセント	夜 ヨル(ガ)	木 ユフ(ガ)	斎 ユキ(ガ)	守 モリ(ガ)	蔀 マキ(ガ)	吹 フキ(ガ)	蛭 ヒル(ガ)	箸 ハシ(ガ)	吐 ハク(モノ)	鑿 ノミ(ガ)	疾 トキ(ガ)	鶴 ツル(ガ)	搦 ツキ(ガ)	館 タチ(ガ)	閑 タケ(ガ)	隅 スミ(ガ)	避 サケ(ガ)

三ミ(ガ) 見ミ(ガ) 身ミ(ガ)  
 目メ(ガ) 女メ(ガ) 芽メ(ガ)  
 世ヨ(ガ) 夜ヨ(ガ) 節ヨ(ガ)

(注) 「槓」のアクセントは山田美妙による。「緩」は原文には糸偏に寄の字が替いてある。「曇」は感歎詞的に考えた。

彦麿が解していたアクセントの三声とはどんなものであろうか。「三声のわきため」の章に

さてかく音声定かに分てらうへにも又其中に平上去の三声の差別あり「外戎にては平上去入の四声の定めあるのみ舟にのりて軸先を南と定めたるをいつか其舟西に向ひたらむに猶軸先を南と思へるが如し」と我師翁の漢字三音考にいはれたり皇朝にては文字はさらにて詞にすら其三声の辨別はなかつた

だ唱る所の音声に三声のわきためありとあり、宣長の四声観によつては、宣長の考えは、此の説(歌神ヲ)の如くにて、平は上らず下らず平なる声、上は上る声、去は下る声なり(古音記伝)

とあるように、契沖の影響をうけている。契沖の四声観は当時の関西方言のアクセントを反映したものであり、江戸言葉のアクセントの型もそのようなものであったとは考えられないのである。彦麿は師のアクセントとは異るといひながら、宣長が、

日ハ平声。樋ハ上声。火ハ去声(漢字三)

といつて語をそのまま江戸言葉に適用して、同じ三声を附してしまつてゐる。思うに彼は江戸言葉におけるアクセントの型の

相違は認めながら、それを区別するのに、宣長がつかつていた三声をそっくり借りて江戸言葉のアクセントを記載したためその観察には従いかねるものがある。しかし同じ型の一群の語は異なる型の語とはつきり区別されている点から考へて、三声の決定も東京語のアクセントの型から推して行つた方が妥当かと思ふのである。

まず二音節の語についてみると、去声と記載している語は東京語のアクセントでは大体〇(ガ)型に属するものであつて、去声は〇(ガ)型と考へられる。

平声と上声については一覽表にみられるように東京語のアクセントと比べて異同がはなはだしいが、現在も三つの型に分類されている代表的な同形の語を平上去の順にならべてみるとほぼ対応していることが察しられる。

鉦 アキ(ガ) 明 アキ(ガ) 秋 アキ(ガ)  
 橋 ハシ(ガ) 端 ハシ(ガ) 箸 ハシ(ガ)

平声は〇(ガ)型、上声は〇(ガ)型であろうと思われ。異同のある語についてはアクセントの変遷ということも勿論考へられるが、彦麿はアクセントを考へる場合に助詞などをつけずにただ単語だけを孤立させて発音したためにはつきりした認識を欠いたものであろう。個々の語について考察してみよう。

去声のうちで、起 オキ(ガ) 裂 サキ(ガ) 避 サケ(ガ) 隅 タケ(ガ) 蒔 マキ(ガ) が〇(ガ)型に属

しているのは、おそらく彦麿は本来の動詞と動詞から来た名詞形との区別が明確でなかつたためにこのような混同をまねいたので

あろう。搦ツキ(ガ) 吹フキ(ガ) は第一音節が無声化したためにアクセントの山がすべているが、以前には一般関東方言にみられるように○型であったと思う。

上声は○(ガ)型であったと推定したが、東京語のアクセントでは○(ガ)型になっているものに、脚・象・紙・埼・墨・剣・時・蚤・屋・雪があげられる。どうしてこのような混同が起ったかについて考えてみよう。彦麿の出生の地が三河国矢作であり、音韻観念の基礎は言語習得の初期においてできあがるものである(有坂博士「音韻」一四一頁)といわれているが、三河国のアクセントを参照したい。柴田武氏の「愛知県のアクセントの分布」(「文字とよれば、名古屋(A)岡崎(B)豊橋(C)を中心とする地域のアクセントで、C地域では二音節名詞第二類石・岩・紙・川・梨・雪を○(ガ)型に発音する傾向があり、このことから東三河(C)と西三河(B)との間に境がおかれている。彦麿の生地はB地域に属するが、何らかの事情でたとえば片親が東三河の出身であるとか)C地域のアクセントに習熟し、これが反映したものであるまいか。

剣は上声に入っているが、金田一先生がいわれたように○(ガ)が古型であり、(移りゆく東京アクセント)江戸言葉でもそうであった平声に属すべき語である。

平声については混同が多く、これは彼に文節的な考えがなかったためと思う。

垣・神は金田一先生が明らかにされたように○(ガ)が古型で、(前掲)江戸言葉でもそうだったのである。

葦は類聚名義抄でアン(ガ)であるところから東では古くは○(ガ)であって彦麿は○(ガ)とまちがえたものであろう。

以上二音節語について気づいた点について述べたが、彦麿が三声に分けてあげた語の型と現在の型との間になお多くのずれがある。これには彦麿自身のアクセント観察眼を疑わしめるものがあるのであり、その正否は更に他の資料などについてたずねなければならぬ。おそらく彼は一部の「あき」「つる」「はし」などの「同音異音」の語にあまりにたずみすぎで、一部にあることから推して考え他にもひろくあるはずだと思ひこんで無理に語をならべたという感があるのである。

一音節の語については、宣長のように三つの型に分けて考えることには大きな疑問が存する。東京語のアクセントの型が近々二百年の間に三型から二型になったなどということは、ほとんど信じられないからである。さきに二音節語のときにも述べたとおり、彼は宣長の説にひかされて強いて二型のものを三型に分けたとしか考えられない。東京語のアクセントでは、二音節語の場合と同じく、去声は●(ガ)型であり、平声は○(ガ)型であったと思う。去声の語は今すべて○(ガ)型に発音されている。ただ身だけは今は○(ガ)型だが江戸言葉では○(ガ)型であったのであろうか。平声の語は大方○(ガ)型に発音されている。金田一先生が論じられたように世は○(ガ)が古型であり(前掲)、江戸言葉でもそうであった。

上声については、多くは○(ガ)型であり、○(ガ)型の語もまじっている。彦麿は○(ガ)型のつもりであげたのであろう。

